

Title	B・ G・ チェックランド バーミンガム派の経済学者、一八一五年-一八五〇年
Sub Title	
Author	中村, 勝己
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1951
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.44, No.8/9 (1951. 9) ,p.549(85)- 551(87)
JaLC DOI	10.14991/001.19510901-0085
Abstract	
Notes	論文紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19510901-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論文紹介

D・S・ランドス

『フランス難局の統計的研究』

(D. S. Landes, "The Statistical Study of French Crises." Journal of Economic History, Vol. 10, No. 2, Nov. 1950, Pp. 195-211.)

数字は言語では表現するに不可能な知識を正確に授けて呉れる。然し老大な数字を整理して一層現実的な結論を引出すことは仲々困難であるから、過去の経済事象を数字を以て理解しようといふ立場は未だ必ずしも一般的にはなつてゐない。ラブルースが第十八世紀フランスの経済事情について關説した場合、然しかかる立場に據つてゐた。尤もラブルースは官廳の各種統計を主要な根據として、特に收穫量の増減が當時の社會階級に對し如何なる影響を及ぼしたかを考察し、そして法外に高い運賃・農村の絶對的な優位・弾力性を缺く生産・大衆支出において、不常に多い食料費部分によつて特徴づけられた舊い型の交換經濟が行なはれた第十八世紀のフランスについて、端的には次の如き景氣循環を主張してゐるのであつた。當時フランスの景氣循環が、かかる經濟事情の下において主として農業によつて決定されたことは絶對の事實である。

一、收穫量の僅かな減少も、大衆支出の大半が食費に充當された第十八世紀のフランスでは、穀類價格を急激に押し上げる。かかる際に農民が全體として多大の利益を享受することはいふまでもない。
二、但し收穫量に顯著な減少が起つた場合は事情が自づと違つて来る。そしてかかる際には、結果として國民の經濟生活全體が當然完全な麻痺状態に陥つてしまふのである。これを第十八世紀フランス人口の壓倒的部分を占めた農民について見れば、食物・種子及び他の必要品のための經費が常に一定である限り、收穫量の顯著な減少によつて市場に販賣すべき量も極度に削減せざるを得ないから、従つて最も裕福な少數の農民を除いた大抵の農民は非常な収入減に苦しむことになつた。農村収入におけるかかる急激な減少は瘦地の耕作を放棄したことによつて尙一段と促進された。
三、第十八世紀のフランスにおいては農村人口が全人口の大部分を占めてゐたから、農村のかかる窮乏によつて工業製品の賣行が不振を極めることになつたのはいふまでもない。
四、工業製品の賣行不振は都市居住者に大打撃を與へた。特に都市における貧民階級の零落が甚だしく、彼等の生活の悲惨は食糧の入手困難によつて一段と深められて行つた。
五、商業活動は制限された。工業製品の産額は著しく低下した。

雇傭量が減少して社會不安は募つた。農業を主要産業としてゐた第十八世紀のフランスについて、收穫量の顯著な減少が齎らすかかる結果は殆んど必然的といはねばならない。

六、従つてこの國を襲つたかかる不況は、豊作に恵まれ國民の大部分を占める一般の農民が裕福になつて初めて正常に復すべきものであつた。

收穫量の増減が社會の全般に對して及ぼした影響は以上の如く決して單純なものではなかつた。收穫量の僅かな減少による穀價の急激な上騰は、農村の好況を導き、勢ひ工業の發展をも刺戟すべき力となつた。然し收穫量に起つた顯著な減少は農村の甚しい窮乏から一般農民の購買力を減退せしめ、かくして農業を除く他の諸産業も今荒廢の極に達したのであつた。

数字は、然し必ずしも實體を傳へて正確であるとはいひきれない。現にラブルースが上述の結論のために利用した官廳の各種統計は、納税のための各自の申告に基づくものであつたから、勢ひ多分に主觀的で疑問の箇所も極めて多く、従つてそれ等を使用する際には数字の一應の吟味から掛らなければならぬといふことはいふまでもない。しかもラブルースがこの點に對する配慮を缺く以上、右の結論にはかかる立物から若干反省が加へらるべきであらう。以下がこの種の批判のための具體的な主たる基準である。

一、結論の基礎となる数字は或る程度まで正確でなければなら

ない。

二、正確の程度が完全である必要がないからといつて、何も不適當な数字を随時任意に利用して差支えないといふわけでは決してない。

三、数字による理解の態度は、本來歸納的な研究の進め方にはかならない。従つて如何なる先入觀も、縱令それが論理的なもの又は有用なものであつたにしても、嚴正な数字と矛盾する限り破棄されるべきである。(渡邊國廣)

S・G・チェックランド

『バーミンガム派の經濟學者』

一八一五年—一八五〇年』

(S. G. Checkland, "The Birmingham Economists, 1815-1850." The Economic History Review, Second Series, Vol. 1, No. 1, 1948, Pp. 1-19.)

廣く信ぜられ強く唱道された見解が政治的表現を全然持たないといふ事は經驗に反する。マンチェスター派はリカード學派の政治的表現であり、バーミンガム派は過少消費説に最も近く、完全雇傭を生ずる自動的組織の實在性を否定した人々の考への政治的具體化であつた。いまケインズの言外の挑戦を採り上げて、ナポレオン戦争後に過少消費説が如何に被ひ清められたか

を説明しようとする場合、その解答の一部はパーミンガム派の來歴の中に求めらるべきである。

一八一五年以後の戦後不況に就て銀行家の受けた非難に應へる爲に、トマス・アトウッドは寄與するところが多かつた。彼は、奔放な工業主義への非難、人口論、農業主義、不生産的消費者概念等々の點で、マルサスと多くの共通點を有した。パーミンガム派の人々は戦後多くの打撃を受けたが、彼等は自然法への信仰による無爲に甘んじなかつたといへ、社會の根柢に觸れようとはしなかつた。又リカード的金屬本位制への盲目的信仰は抱くことなく、通貨不足を救ふ爲に紙幣發行を唱へたが、その主唱者は商人及び銀行家であつた。

彼等は貨幣政策の中に不況の救済策を見出したのみならず、引く完全雇傭の問題に關心を抱いた。アトウッドによれば、不況は「流通手段がその目的に等しい限り」起らず、物價下落は窮極的には勞働者の負擔となり、「彼の陋屋の慰安さへも奪ひ取つて了ふ」。そしてその結果は一般的過少消費である。金に反す爲に起る強いデフレーション的壓力と、増大する工業生産性と金供給の緩慢な増加との乖離とから、價格は下落し、非生産者に有利な富の再分配、凡ての現存貨幣關係の崩壊、及び國民所得の減少が起る。マルサスとパーミンガム派との間には、社會を農民と製造業者との二群に分ち、過少消費説を探る點を始めとして、多くの類似點が見出される。貨幣政策の目的は遊休資源を利用し、

地主への貸付に補はれて、完全雇傭を實現し維持するにある。實質賃銀と價格との關係はパーミンガム派内部でも一致してゐない。デフレーションによる實質賃銀切下の企は總需要を減少するであらう。國內價格の騰貴とその結果たる貿易逆差による金銀流失は、紙幣によつて代へられ、ばよいとしてゐるが、その流失に當つて貿易をどう管理するかは明かにされてゐない。マルサスと同じくアトウッドは、リカード學派の社會心理や價格の完全な流動性等に關する單純な學説を烈しく攻撃した。

パーミンガム派は、かゝる政策を實施する爲には、實施の方法を考へるより、政府機關を掌握する事に努力を拂つた。彼等はその目的たる完全雇傭を、直接雇傭面からではなく、金融面即ち紙幣發行による商工業への貸付及び通貨膨脹によつて實現せんとした。アトウッドは、需要を減ずるといふ理由で、社會政策的財政政策に反對した。彼は金の拋棄に失敗したので、デフレーション的壓力を緩和する凡ゆる手段を擁護した。彼は自らの論理の矛盾には氣づかなかつたのである。

パーミンガム派は最初政府を支配しようとし、又國會改革運動に乗せんとしたが、何れにも失敗した。一八三〇年のパーミンガム下層・中産階級聯合も望ましい結果は得られず、一八三九年下院へのチャーティスト國民請願書の提出、一八四三年の國民聯合に於ても意圖する結果は得られず、剩さへ濠州及びカリフォルニアの金發見により通貨問題は永く取上げられなくな

つた。加へて一八四〇年の穀物法論争によりパーミンガム派はマンチエスター派に敗れ去つたのである。

通貨の自動調節説を拋棄するパーミンガム派は、リカード學派にとつては不埒であつたが、産業發展の爲の最善の條件を造出せんとした點で兩者は共通であつた。パーミンガム派は國民的・非政治的貨幣制度を作らうとした。アトウッドには人口論が省略せられてゐる。彼はケインズの如く、貨幣理論を國民所得論に押戻し、經濟學を新たな發展に解放した。彼がもつと政治から手を引いてゐたならば、切迫感によつて戰術的誤謬に陥るが如き事はなかつたであらう。事實彼は完全雇傭を維持すべき責任を政府の双肩に負はせ、其を助ける手段として貨幣・信用機構を指示し、身を粉にして其の採用を訴へたのであつた。

(中村勝司)

ハッカー、ウィリアムスン、ハイデー

『資本主義と經濟的進歩』

(Louis Hacker, Harold Williamson, and Ralph W. Hidy, "Capitalism and Economic Progress," American Economic Review, Vol. 40, No. 2, May, 1950, pp. 105-143.)

一九四九年十二月ニューヨーク市で開かれたアメリカ經濟學聯合の年次大會には恒例の經濟史學聯合との共同研究發表があ

論文紹介

つた。共通テーマは「アメリカ資本主義と經濟進歩」。コロンビア大學のルイス・ハッカー教授の司會の下に、ハロルド・ウィリアムスンの「アメリカの經濟進歩の評價」、ジョージ・タイボウの「アメリカの進歩における刷新」、エドガー・フーヴァーの「資本蓄積と進歩」と題する三つの報告が行なわれた。ここにはハッカー教授の挨拶と、ウィリアムスン氏の報告要旨とこれに對するハイデー氏の批判とを紹介する。

司會者の言葉——ルイス・ハッカー——

資本主義は今日までの間にそれ自體について更めて反省を求められる時期に幾度か遭遇してゐる。例えば百年前のヨーロッパに於いて、デイスレーリ、ミル、カーライル等が新しい産業主義を唱え、五十年前のアメリカに於いて、ヴェブレン・パッサン・アダムス等が新しい道徳的價值及び社會連帶責任に基いた公共政策の採用を主張した如きは、正にその時期に相當する。そして今やまた、吾々はかかる時期に身を置いているのである。この時にあたり、吾々はアメリカ資本主義が過去においてどれだけの經濟的成果をあげたかについて、更めて考へてみる必要がある。これを明らかにしうるならば、吾々のとるべき將來の公共政策についても、學問的に検討することが可能となるであらう。表題の如き共同テーマの重要な所以はこゝにある。アメリカの經濟的進歩の評價——ハロルド・ウィリアムスン——